

「道徳の教科化をめぐる」③

一般社団法人在家仏教協会

理事 菅原 伸郎
(すがわらのぶお)



道徳教育が小学校では二〇一八年度から、中学校では二〇一九年度から「特別の教科」として強化される。これまで二回にわたり、通知表の「評価」について、愛国心や畏敬の念について、などを論じてきた。最後に宗教者の役割についても考えてみたい。

検定教科書の登場

文部科学省は今回の教科化を機会に、子ども同士の討論を重視する道徳教育を目指す、という。上から教え込むのではなく、話し合いを尊重する路線のようだ。弱い者いじめはいけないとか、助け合おうとか、討論を通して共通の認

識が深まるかもしれない。とくに公衆道徳や公共性に関わる分野については、話し合いで決めたことは守ろう、といった空気が出てくることを期待したい。

一方で、文部科学省の検定する道徳教科書が初めて登場する。これまで同省編集の副教材『私たちの道徳』（二〇一三年度までは『心のノート』）や、各地域で採用する副読本が使われていたが、これからは教科書会社制作の検定教科書となる。

その編集作業はこれから始まるが、気になることもある。従来は学校や教師の裁量にある程度は任されていた授業が、文部科学省の意向に沿った内容に縛られるだろ

うからだ。これまでも学習指導要領で方向づけられてはいたが、検定を通じて授業の進め方や題材の選択にいつそう枠がはめられるのではないか。

弱さや醜さも語りたい

たとえば、現在使われている中学校用『私たちの道徳』の二二〇頁にはこんな一文がある。

《欠点や弱点のない人間はいない。誰の心の中にも弱さや醜さがある》

どんな人間も、たとえば殿上人から地下人^{ぢげん}まで、すべての人が欠点や醜さを持っている、というのがだ。文部科学省の公式文書としては画期的な宣言かもしれない。実は二〇〇二年度からの『心のノート』にも同様の文章があり、私はかねて注目してきた。この自覚があつてこそ、真の人間探求、宗教や思想が始まるからだ。

しかし、せっかくの人間理解もさほど深まっていはいかない。すぐ続いて《同時に、人間はその弱さや醜さを克服したいと、願う心をもっている》とあり、この章のテ

ーマ《人間の強さや気高さを信じ生きる》へ、明るく、あっさり、元氣よく進んでいく。

鈴木大拙は『日本の靈性』（岩波文庫など）で、万葉集を例に「古代の日本人はきわめて素朴な自然児であつた」と論じた。野山を愛し、別れを悲しみ、恋をし、神々を畏れる、その子供っぽさからかっている。そして日本人の内面が本当に進んだのは鎌倉期に入ってからであり、そこで初めて本当の靈性や内省、そして超越への関心が深まった、と書いていた。

そもそも華嚴経には《我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔》という懺悔文がある。仮に、縁があつて懺悔や罪といった宗教の根幹に触れた教師がいたとして、前述の《欠点や弱点のない人間はいない》の箇所をもっと深く教えられるとしたら、それは素晴らしいことだ。検定教科書などの水準を超えて大いに語ってもらいたい。道徳教育の「強化」がそうした創意を阻まないようにも願いたい。

教える側への懸念

今日の日本では、女子高校生が「人を殺してみたかった」などと同級生を殺す事件も起きている。欲望をあまりにあり、豊かさを追い求めてきた社会全体の責任だろう。小学生には難しくとも、中学生にはただ生命の大切さを説くだけでなく、自らの死、他人との別れ、絶望などについて、もう少し考えさせておきたい。

といっても、そこまで深めることはなかなか難しい。一つの理由は、道徳の授業は特別な能力を持つ教師が担当するのでなく、クラス担任がそれぞれの教室で話すことになっているからだ。どの公立学校でも、宗教書や聖書や仏典



(写真提供：菅原伸郎)

を開いたことのある先生はごく少数だろう。公衆道徳のような分野はともかく、内面について語ることはあまり期待できない。

今後、教員研修の機会をふやすとか、大学の教職課程を強化するとか、それなりの対策はとられるはずだ。しかし、まだまだ人生経験の浅い先生たちにそれが可能だろうか。むしろ、ベテランの専門教師に任せる、あるいは退職したOBを再雇用する、といった道が検討されてよい。道徳科だけでなく、国語科や芸術科でも人生をいっそう深く考えさせる授業を模索してはどうだろう。

私が訪ねたドイツの公立学校では、秋の一日、修道院に出掛けて十六歳くらいの生徒たちに黙想をさせていた。神奈川県にあるカトリック系の栄光学院でも、中学から高校までの六年間、毎授業の始まりと終わりに三分間の黙想をさせている。いずれも、積極的に孤独と向き合わせることで、内面の成長を促したいのだ。公立学校では難しいかもしれないが、何か学ぶことがあるのではないか。

ちなみに、今回の道徳教育の教科化は、宗教系私立学校の「宗教科」と直接は結びつかない。文部科学省の本音としては愛国心などを教えてもらいたいだろうが、各宗教各宗派のさまざまな教義にどう口を挟むべきか、とても手が出せないというところらしい。

人格の完成を目指して

公立学校でも宗教をもっと教えてほしい、という声をよく聞く。しかし、日本は欧米やイスラム諸国のように特定の宗教が圧倒的に強い社会ではない。仏教であれ、神道であれ、特定の教義や儀礼をそのまま学校内に持ち込むことは反発を招くだろう。

しかし、偉大な先人の「思想」を背景に人生を語ることはできるはずだ。たとえば、教育基本法は一九四七年に制定された旧法の時代から、教育の目的に「人格の完成」を掲げてきた。では、この「人格の完成」とは何なのか。人によって立場によって答えはさまざまだろうが、仏教者なら「正覚」、つまり迷いや執着を去って物事をあ

りのままに見ることと考える。これならば科学教育と矛盾もしないし、狂信や偏狭さを否定する力にもなるだろう。

僧侶や信徒が教えを公立学校に持ち込むことはできない。そうではあるが、それぞれの地域で、それぞれの寺院で、まずは若い教師や親たちと人生を語り合うことは可能ではないか……。ここまで書いて、私は以前に訪れた沖縄県石垣市にある浄土真宗本願寺派の誓願寺を思い出した。仏教不毛の地と言われる琉球列島で、日本最西南の寺院を守ってひたすら朝夕の鐘を突く住職・谷口隆信さんの姿である(写真)。

●プロフィール

菅原伸郎(すがわら・のぶお)

一九四一年生まれ。早稲田大学政治学科卒。朝日新聞社で論説委員、大阪本社学芸部長、東京本社「こころ」編集長などを務め、二〇〇三年に退社。東京医療保健大学教授を経て、現在は立正大学講師として「宗教教育論」を担当。著書に『宗教をどう教えるか』『宗教の教科書 十二週』、編著に『戦争と追悼——靖国問題への提言』。